

行政裁判法

訴願法

右謹テ上奏シ

陛下ノ裁擇ヲ仰キ併セテ樞密院ノ
議ニ附セラレシコトヲ請フ

明治二十三年三月二十五日

内閣總理大臣伯爵山縣有朋

法律第

號

行政裁判法

第一章

行政裁判院組織

第一條

行政裁判院ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條 行政裁判院ニ院長一人及評定
官ヲ置ク評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ
之ヲ定ム

第三條 院長ハ勅任トス評定官ハ勅任
又ハ奏任トス
院長及評定官ハ内閣ノ奏薦ニ依リ
任命セラルルモノトス

第四條 院長及評定官ハ衆議院議員又
ハ府縣郡市町村議會ノ議員若クハ參
事會員タルコトヲ得ス

第五條 院長及評定官ハ内閣ヨリ理由
ヲ具シテ上奏スルニ非サレハ其職ヲ
罷免シ又ハ轉職セシメ若クハ非職ト
為スコトヲ得ス

第六條 院長ハ行政裁判院ノ事務ヲ總
理シ自ラ裁判長ト為リ若クハ評定官
ニ裁判長ヲ命ス
院長故障アルトキハ評定官中官等最
モ高キ者之ヲ代理ス

第七條 行政裁判院ノ裁判ハ裁判長ヲ
併セ評定官五人以上ノ列席ヲ要ス但
列席ノ人負ハ奇數ニ限ル
議決ハ過半數ニ依ル

第八條 院長又ハ評定官ハ左ノ場合ニ

於テ評議及議決ニ加ハルコトヲ得ス

一 裁判スヘキ事件自己又ハ父母兄弟姉妹若クハ妻子ノ身上ニ関スルトキ

二 裁判スヘキ事件一私人ノ資格ヲ以

テ意見ヲ述ヘタルモノ又ハ理事者

代理者若クハ職務外ノ地位ニ於

テ取扱ヒタルモノニ関スルトキ

三 裁判スヘキ事件行政官タルノ

資格ヲ以テ其事件ノ處分又ハ裁

決ニ參與シタルモノニ関スルト

キ

評議及議決ニ加ハルコトヲ得サル事

由ノ有無ニ就テハ行政裁判院ハ本人

ヲ回避セシメ之ヲ議決スヘシ

第九條 行政裁判院ニ書記ヲ置ク其負
數及職務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
書記ハ行政裁判院長之ヲ判任ス

第十條 行政裁判院ノ處務規程ハ勅令
ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 行政訴訟ノ代人又ハ辯護人
タルコトヲ得ルハ行政裁判院ノ認許
ニタル辯護士ニ限ル但行政裁判院ハ
何時ニテモ其認許ヲ取消スコトヲ得

第二章 行政裁判院権限

第十二條 行政裁判院ハ法律ニ依リ行
政裁判院ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審
判ス

第十三條 行政廳ト一個人トノ間ニ起
リタル通常民事ニ関スル訴訟ハ行政
裁判院ノ管轄ニ屬セス

第十四條 行政裁判院ハ行政官吏ニ對
スル損害要償ノ訴訟ヲ受理セス
行政官吏ニ對シ損害要償ノ訴訟ヲ通
常裁判所ニ提起セントスル者ハ先ツ
行政裁判院ニ出訴シテ其處分ノ越權
ナルヤ又ハ法律勅令ニ掲ケタル責任
ニ屬スル職務上ノ處分ヲ怠リタルヤ
否ノ判決ヲ受クヘシ

第十五條 行政訴訟ハ法律ニ特別ノ規
定アルモノヲ除ク外訴願法ニ依リ地
方上級行政廳ノ裁決ヲ經タル後ニ非
サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス
各省大臣ノ處分又ハ内閣直轄官廳又
ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シテハ
直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得
各省又ハ内閣ニ訴願ヲ為シタルトキハ
行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第十六條 行政廳ハ行政裁判院ノ判決
ノ旨ニ從ヒ直ニ相當ノ處分ヲ為スヘ
シ

第十七條 行政裁判院ノ裁判ニ對シテ
ハ再ヒ出訴スルコトヲ得ス

第十八條 行政訴訟又ハ民事訴訟ヲ許
シタル場合ヲ除ク外行政上ノ處分ニ
對シテハ單ニ訴願ヲ為スコトヲ得

第十九條 行政裁判院ハ其権限ニ關シ
テハ自ラ之ヲ決定ス

通常裁判所ト行政廳又ハ行政裁判院
トノ間ニ起ル権限ノ爭議ハ権限裁判
所ニ於テ之ヲ裁判ス

第二十條 行政裁判院ノ判決ノ執行ハ
通常裁判所ニ囑托スルコトヲ得

第三章 行政訴訟手續

第二十一條 行政訴訟ハ行政廳ニ於テ

處分書若ク裁決書ヲ交付シ又ハ告知

シタル日ヨリ六十日以内ニ提起スヘ

シ六十日ヲ經過シタルトキハ行政訴

訟ヲ為スコトヲ得ス但法律ニ特別ノ

規定アルモノハ此限ニ在ラス

訴訟提起ノ日限其他此法律ニ依リ行

政裁判院ノ指定スル日限ノ計算竝ニ

天災事變ノ為メ遷延シタル期限ニ關

シテハ民事訴訟ノ規定ヲ適用ス

附

第二十二條

行政訴訟ハ法律ニ特別ノ規定アルモノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止セス但行政廳及行政裁判院ハ其職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルトキハ其處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

内

月

第二十三條

行政訴訟ハ文書ヲ以テ行政裁判院ニ提起スヘシ

法律上法人ト認メタル團體若クハ會社ハ其名ヲ以テ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條

行政訴狀ハ左ノ事項ヲ記載シ原告人署名捺印スヘシ

- 一 原告人ノ住所身分職業年齡
 - 二 被告ノ行政廳又ハ其他ノ被告人
 - 三 要求ノ事件及其理由
 - 四 立證
 - 五 年月日
- 行政訴狀ニハ其經歷シタル訴願書裁決書竝ニ證據書類ヲ添フヘシ

第二十五條 行政訴状ハ被告人ニ送付
スル為メニ必要文書ノ副本ヲ添フヘ
シ

第二十六條 行政裁判院ハ原告ノ訴状
ニ就テ審査シ若シ法律上行政訴訟ヲ
提起スヘカラサルモノナルカ又ハ法
律上ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ其
理由ヲ付シタル裁決書ヲ以テ之ヲ却
下スヘシ
其訴状ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ
之ヲ改正セシムル為メ期限ヲ指定シ
テ還付スヘシ

第二十七條 行政裁判院ニ於テ訴狀ヲ
受理シタルトキハ其副本ヲ被告人ニ
送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書
ヲ差出サシムヘシ
答辯書ハ原告人ニ送付スル為メ必要
文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十八條 行政裁判院ハ必要ナリト
認ムルトキハ其期限ヲ指定シテ原告
被告交互ニ辯駁書及再度ノ答辯書ヲ
差出サシムヘシ

第二十九條 行政裁判院ハ訴狀及答辯
書ノ附屬文書ノ副本ヲ原告被告交互
ニ送付スル代リニ院内ニ於テ之ヲ閱
覽セシムルコトヲ得

第三十條 行政裁判院ハ訴訟審問中其
事件ノ利害ニ關係アル第三者ヲ訴訟
ニ加ハラシメ又ハ第三者ノ願ニ依リ
訴訟ニ加ハルコトヲ許可スルヲ得
前項ノ場合ニ於テハ行政裁判院ノ判
決ハ第三者ニ對シテモ亦其効力ヲ有
ス

第三十一條

原告被告及第三者ハ行政

裁判院ニ於テ認許シタル辯護士ヲ用

井テ代人タラシムルコトヲ得

行政廳ハ其官吏又ハ其申立ニ依リ主

務大臣ヨリ命シタル委員ヲシテ代理

ヲ為サシムルコトヲ得

代人其他官吏又ハ委員ハ委任状ヲ以

テ其部理代人タルコトヲ證明スヘシ

第三十二條

行政裁判院ハ豫メ指定シ

タル期日ニ於テ原告被告及第三者ヲ

呼出シテ審廷ヲ開キ口頭審問ヲ為ス

ヘシ

原告被告及第三者ニ於テ口頭審問ヲ

為スコトヲ望マサル旨ヲ申立タル場

合ニ於テハ行政裁判院ハ文書ニ依テ

直ニ判決ヲ為スコトヲ得

第三十三條 審廷ニ於テハ原告被告及
第三者ノ辯明ヲ聽クヘシ
審廷ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ得タル
者ヨリ順次發言スヘシ
原告被告及第三者ハ事實上及法律上
ノ點ニ就キ文書ニ盡サ、ル所ヲ補足
シ又ハ誤謬ヲ更正シ若クハ新ニ證憑
ヲ提出シ及證書ヲ提示スルコトヲ得

第三十四條 主務大臣ハ必要ト認ムル
場合ニ於テハ公益ヲ辯護スル爲メ委
員ヲ命シ審廷ニ差出スコトヲ得
行政裁判院ハ判決ヲ爲ス前ニ委員ヲ
シテ意見ヲ陳述セシムヘシ

均
同

第三十五條 審廷ハ之ヲ公開セス

内

附

第三十六條 行政裁判院ハ原告被告及
第三者ニ出廷ヲ命シ並ニ必要ト認ム
ル證憑ヲ徵シ證人及鑑定人ヲ呼出し
審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲サシムル
コトヲ得
證人又ハ鑑定人トシテ審問ニ應シ證
明及鑑定ヲ爲スヘキ義務ニ關シテハ
民事訴訟ノ規定ヲ適用ス其義務ヲ盡
サ、ル場合ニ於テ處分スヘキ科罰ハ
行政裁判院自ラ之ヲ判決ス

内

附

行政裁判院ハ口頭審問ニ於テ舉證ノ
手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若ク
ハ通常裁判所又ハ行政廳ニ囑託シテ
之カ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十七條 行政裁判院ニ於テ審問中

ノ事件ニ關シ民事上ノ訴訟起ルコト
アリテ通常裁判ノ確定ヲ待ツノ必要
アリト認ムルトキハ其審判ヲ中止ス
ルコトヲ得

第三十八條 審問手續ニ關スル故障ノ
申立ハ行政裁判院自ラ之ヲ判決ス

第三十九條 呼出ノ期日ニ於テ原告若
クハ被告若クハ第三者出廷セサルコ
トアルモ行政裁判院ハ其審判ヲ中止
セス
原告被告及第三者共ニ出廷セサルト
キハ行政裁判院ハ審問ヲ行ハス直ニ
判決ヲ為スコトヲ得

第四十條 裁判宣告書ハ理由ヲ付シ裁判長評定官及書記之ニ署名捺印シ其謄本ニ行政裁判院ノ印章ヲ捺シ之ヲ原告被告及第三者ニ下付スヘシ
行政訴訟ノ文書ニハ訴訟用印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第四十一條 行政訴訟手續ニ關シ此法律ニ規定ナキモノハ行政裁判院ノ定ムル所ニ依リ民事訴訟ニ關スル規定ヲ適用スルコトヲ得

第四章 附則
第四十二條 此法律ハ 年 月 日ヨ
リ施行ス

第四十三條 第十九條第二項ノ權限爭
議ハ權限裁判所ヲ設クル迄ノ間樞密
院ニ於テ之ヲ裁定セシム

第四十四條 行政裁判ニ關スル従前
ノ法律規則ニシテ此法律ト抵觸スル
モノハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十五條 此法律施行ノ前既ニ行政
訴訟トシテ受理シ審理中ニ係ルモノ
ハ仍従前ノ成規ニ依リ處分スヘシ

第四十六條 第二十一條第一項ニ定メ

タル出訴期限ハ此法律施行ノ前各省
大臣ノ處分又ハ内閣直轄官廳又ハ地
方上級行政廳ノ處分ヲ受ケタル者並
ニ請願規則ニ依リ主務大臣ノ指令又
ハ内閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳
ノ指令ヲ受ケタル者ニ對シテハ此法
律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
請願規則ニ依リ内閣ノ裁令ヲ經タル
モノハ更ニ出訴スルコトヲ得ス

明治二十三年度歳出豫算中第一豫
 備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ノ件
 茲ニ敬テ上奏シ
 陛下ノ採擇ヲ仰キ併セテ樞密院ノ
 議ニ附セラレシコトヲ請フ
 明治二十三年四月二十九日

内閣總理大臣伯爵山縣有朋

内閣